

## 往生傳の始源 (三)

加藤智學

### 六

佛在世の往生者の事蹟は『阿含』その他の古聖典に種々記載せられてあり、有學の道位を得て勝處に往生したる人々の特に其の行蹟の記傳せられたるは、多く篤信正行の優婆塞にして、須達多 (Sudatta) 長者・頻婆娑羅 (Bimbisāra) 王・摩訶男 (Mahānāma) 王・等の如きは實に其の代表的人格であつた。今や此等の代表的人格に就て既に記叙したりしことなれば、其の他の往生者に就ては、略して猶ほ幾人かの事蹟を記述することにしよう。

憍薩羅 (Kosāla) 國の波斯匿 (Prasenajit) 王の子、祇陀 (Ceta) 逝多) 太子は、淨信善行の優婆塞であつた。『增一阿含』三の「清信士品」には「聖衆に供奉して意恒に平等なりし」と讃美せられてゐる。須達多長者が祇園精舍を建立せし時、祇陀太子は、其の土地を長者に賣り、其の樹林を奉獻し、かくて祇樹給孤獨園は造營せられたのであつた。爾の後、太子は、篤く三寶に歸依し、正法を聞信して、其の心行、恒に清淨平等であつた。毗流離 (Vidūḍabha 惡生) 王、憍薩羅の王位を篡奪し、父

波斯匿王は國外に遁走して、王舍城に到りて崩す。その後、毗流離王の大軍は、迦毗羅衛城を襲撃して、釋迦族七萬七千人を枉殺す。此の大逆惡の事件には、祇陀太子は參加せず、終に毗流離王の問責を受け、此の大慘劇の最後の犠牲者たらざるを得なかつた。毗流離王が釋迦族を屠殺して舍衛城 (Śāvatthi) に歸還したりし時、祇陀太子は深宮に在り、高樓の上にて諸の姝女と與に音樂を演奏して居た。蓋し王位篡奪・親族屠殺の大慘劇を知聞しつゝ、やがては自己の上にも來るべき運命を豫想して、此の世の名殘にもと高樓に登り伎樂を奏して在りしには非ざるか。毗流離王は祇陀太子の宮殿に到り、徐行を請ひし門番を殺し、太子を喚び出して問責す。「我、怨家を討ちて非常に疲勞せるに、汝は何ぞ此に在りて欲樂を受くるや。我と釋迦族と鬭ひしことを知らざるや。」その事は聞けり。されど、いぶかし。大王。誰か是れ怨家なるや。「迦毗羅衛の釋迦族は即ち是れ我が怨家なり。汝いま何故に妓女と遊戲して我を佐けざるや。」若し釋迦族にして是れ怨家ならんには、誰か善友ならんや。我は衆生の命を殺害するに堪えず。」かく問答して、毗流離王は祇陀太子の言を聞きて大に怒り、「此も亦釋迦族の黨類なり、直ちに誅戮すべし」と命ず。諸臣、即ち祇陀太子を殺害す。太子は命終りて三十三天 (Tṛāyastriṃśa-deva 忉利天) に往生した。人間の勝報猶ほ未だ盡きざるに、殺戮せられて天界に往生し、隣次に天の妙樂を受け、五百の天女と相共に娛樂する果報を得た。『根本說一切有部毘奈耶雜事』九・『增一阿含』二十六の第二經・等に記載する所を會合すれば、

祇陀太子の往生の事蹟は、斯くの如くに物語り傳へられてゐるのである。

## 七

『雜阿含』四十六の第二經には、佛が王舍城(Rājagṛha)の迦蘭陀竹園(Venuvana-kalandakanivāpa)に住し給ひし時、王舍城の貧困なる一りの優婆塞が三十三天に往生したことを、叙傳してゐる。彼は貧窮辛苦の生活を持続しつゝ、篤く佛法僧を信じ、禁戒を受持し、多聞廣學にして、力めて惠施を行ひ、正見成就の修道者であつた。さるほどに身壞命終して三十三天(忉利天)に往生す。かくて其の忉利天に住する餘の諸天に勝ること三事あり。三事とは、一には天壽、二には天色、三には天名稱である。此の三事特勝の果報を得た。篤信の士、佛を念じ法を念じ僧を念じて、戒を持し施を行へば、善處天上に往生して、天壽・天色・等の特勝の果報を受得する。『增一阿含』四十九の第八經には、阿那邠那(Anāpindada給孤獨)長者、三十三天に往生して、天壽・天色・天樂・天威神・天光明の五事の功德、彼の諸天に勝れたと、叙傳せられてゐる。又『增一阿含』三十二の第四經には、佛、波斯匿(Prasenajit)王の爲に說法して、國王、法を以て治化し、非法を以て治する無くば、命終の後、名稱朽ちず、天上善處に往生して、六事の功德を増す、一には天壽、二には天色、三には天果、四には天神足、五には天豪、六には天光なりと、訓へられたと、記載せられてあり。今また王舍城の貧しき一士夫の三十三天に往生せるを説けるには、天壽・天色・天名稱の三事特勝が記叙せ

られてゐる。原始時代の往生記傳には、處々に斯うした叙説の有ることを注意すべきである。我が日本佛教の初期に於て聖德太子御往生の相狀を繡出したる天壽國曼荼羅の銘文に「我が大王は應に天壽國の中に生ずべし」と記せる其の「天壽國」なる名稱は、蓋し如上の善處天上の往生の功德を説ける古聖典の言句に據れるものならんか。

八

佛が毗舍離(Vāṣāṇī)城に入りて乞食し給ひし時、城内に毗羅先(Vīrasena)といふ大長者あり、多くの財寶を有し、慳貪にして惠施の心なく、唯だ宿福を食みて更に新しき福業を造らず、諸の姝女を將ゐ後宮に在りて伎樂を演奏し娛樂に耽つて居た。佛は阿難(Ānanda)に「此の長者は七日の後に命終り涕哭地獄の中に生ずるであらう」と告げられた。佛は又阿難の間に答へて、「此の長者は、昔種多し所の善根已に盡きて、今や死を免れず、されど、若し鬚髮を剃除し三法衣を著し出家學道すれば、地獄に墮つる罪を免るゝことを得べし」と告げられた。そこで阿難は彼の長者の家に往きて長者に此の事を告げた。長者は恐懼して阿難の勸告を受けながらも、七日と云へば猶ほ時日のあることなれば五欲の快樂に耽つて然る後に出家學道しやうと思念した。阿難は毎日長者を訪れて出家せよと勧めた。かくて七日を経過し、最後の日に阿難は長者をつれて佛所に往詣し、佛勅を受けて長者を出家せしめ、鬚髮を剃除し三法衣を著せしめて正法を教授した。阿難は毗羅先比丘に先づ



十念を學せしめて、「汝當に念佛・念法・念比丘僧・念戒・念施・念天・念休息・念安般・念身・念死を修行すべし、此の十念を行すれば、便ち大果報を獲、甘露味を得ると、謂はるゝ」と告げて、懇切に教訓した。毗羅先是、阿難の教を受け、是くの如き法を修行して、其の日に命終り、四天王天 (catvumahārājikāyika-deva 四大王衆天) に往生した。出家して十念を修學したることにより地獄の罪果を免れて善處天上に往生したのである。阿難は彼の身を闍維 (bhāpeta 燃焼) して世尊の所に至り、彼の死を言上して其の生處を問ふた。世尊は「今此の比丘は命終して四王天に往生す」と告げられた。阿難は更に「彼處に於て命終りなば當に何處に生すべきや」と問ふた。世尊は其の間に答へて、「彼處に於て命終れば當に三十三天 (Trāyastriṃśa-deva 忉利天) に往生すべし。それより展轉して豔天 (Yama-deva 夜摩天) 兜術天 (Tuṣita-deva 覩史多天)・化自在天 (Vimānarati-deva 樂變化天)・他化自在天 (Paranirmitavāśavartī-deva) に生じ、彼處に命終りてまた還來して四王天に生じ七變周旋して最後に人身を得て出家學道して當に苦際を盡くすべし。然る所以は、斯は如來に於て信心ありしが故なり。若し衆生ありて牛をち、しほ羣る如き頃、信心絶えず、十念を修行すれば、其の福、量る可からず、能く量る者あること無し。是くの如く。阿難。當に方便を求めて十念を修行すべし」と告げられた。是れ『增一阿含』三十四の第五經に記傳する所である。此の經説の最後の聖訓は、道綽禪師の『安樂集』下十一には、之を取意して、「若し衆生ありて、善心相續して佛の名號を稱ふること、一たび牛

乳を搗しほる如き頃あまならんに、得る所の功德は、上に過ぎて量る可らず、能く量る者あること無し」と引出してあり。十念の第一は念佛にして、是れ最要の行であり、稱名念佛の功德廣大なるが故に、綽禪師は斯くの如くに取意して引載せられたものである。如上の事蹟は亦『佛說出家功德經』として誦傳別行せられてゐる。此の經說に據れば、鞞羅羨那(Vīrasena 勇軍)は、毘舍離城の梨車(Licchavi)族の王子である。彼は阿難の警告を受けて、第七日に出家し、一日一夜淨戒を修持して命終つた。佛は阿難に告げ給はく、「鞞羅羨那比丘は、生死と地獄の苦を畏れ、欲を捨て出家して、一日一夜、淨戒を持したるが故に、四天王天に生じ、北方天王毘沙門(Vaśīṣṭhadeva)の子と爲り、五欲を貪受し、諸の婬女と娛樂し、壽五百歳にして命終り、三十三天に轉生し、帝釋(Sakradevendra)の子と爲り、千歳にして壽盡きて、焰天に生じ、焰天王の子と爲り、二千歳にして命終りて、兜率天に生じ、天王の子と爲り、四千歳にして命終りて、自在天上に往生し、天王の子と爲り、八千歳にして命終りて、他化自在天に生じ、天王の子と爲り、最妙の樂を受け、心極めて迷醉し、萬六千歳、是くの如く樂を受け、六欲天に於て往來すること七反、此の毘羅羨那は、一日一夜出家したるを以ての故に、滿二十劫、地獄・餓鬼・畜生に墮せず、常に天・人に生じ、最後に人中にて富樂の家に生れ、壯年過ぎて、世を厭ひ出家し、勤修精進して、常に正念を行じ、五陰に於て苦・空・無我を觀じ、解法の因縁にて辟支佛(Pratyekabuddha 獨覺)と成り、毘流帝(Vīriti)と名く。是の時に於て

大光明を放ち、諸の群生をして三乗解脫の因縁を種えしめん。斯くの如く此の經には出家の功德が説示せられてゐる。而して六欲行天(Sat-kāma-avacara-deva)に往生し轉生する姿が懇説せられてゐて、原始時代に於ける低級なる往生の相狀を窺觀せしめらるゝものがある。

## 九

佛が羅閱城(Rājagṛha)の伽蘭陀竹園に在りました時、脊に風痛を患ひ、優頭槃(Udumbara)をして城内に入り溫湯を求めしめられたことがある。羅閱城に毗舍羅先(Viśravaṇa)といふ長者あり、善根を種えず、戒なく信なく、邪見にして善惡の果報あることを信せず。優頭槃は天眼を以て觀じて、此の長者が五日の後に命終りて啼哭地獄に生すべきことを知り、五道大神の化作したる使人を將ゐて彼の長者の門外に往至した。かくて長者は優頭槃の欲求を聽き、五道大神の勸告に従ひ、香湯と石蜜を授與した。五道大神は優頭槃と共に世尊の所に至り、此の香湯を世尊に奉獻した。世尊は香湯を以て身體を沐浴し給ひしかば、風痛は暫時にして平癒して更に増劇せず。さるほどに、毗舍羅先長者は、五日の後、命終りて、四天王中に往生した。優頭槃は、長者の命終を聞き、世尊の所に往き長者の生處を問ふた。世尊は優頭槃の間に答へて、「長者は命終して四王天に往生した。彼處に於て命終りて當に四王天に生じ、三十三天に生じ、乃至、他化自在天に生ずべし。かくて復彼處に命終りて四王天に來生せん。長者は、六十劫中、惡趣に墮せず。最後に人身と爲ることを得

て、鬚髪を剃除し三法衣を著し、出家學道して辟支佛(Pratyekabuddha)と成らん」と説示せられた。此は是れ『增一阿含』二十七の第七經に叙傳する所である。

一〇

舍衛城(Srāvastī)に黎師達多(Risidatta)・富蘭那(Purāṇa)と云ふ兄弟の優婆塞(Upāsaka 清信士)が居た。黎師達多是梵行を修せざれども智慧勝れ、富蘭那は梵行を修し離欲清淨なる信士であつた。此の兄弟は波斯匿(Prasenajit)王の大臣である。『四分律』十五には「波斯匿王の土境の人民反叛す。大臣兄弟二人あり。兄を利師達と名け、弟を富羅那と名く。王、此の二人をして軍を領し征罰せしむ」とあり。されば、王の命により叛民を征伐したこともあつた。二人ともに篤信なる聞法者であつて、黎師達多是正法を信解して智慧すぐれ、富蘭那は戒を持し貪欲を離れ香花に著せず諸の鄙凡なる事物を遠ざけて清らかな生活をして居た。かくて此の二人の兄弟は俱に命終つて同じく一趣に往生した。世尊は記説して、「二人は同じく一趣に生じ同一に受生し、同じく後世に於て斯陀含(Sakṛdagāmin)一來果を得て兜率天(Tuṣita-deva)に生じ、一たび世間に來りて苦邊を究竟せん」と告げられた。富蘭那の娘の鹿住(Migasālā)といふ優婆夷(Upāsikā 清信女)は、父と叔父の同一受生に就て疑を懷き「我が父富蘭那は先に梵行を修して欲著を離る、叔父の黎師達多是梵行を修せず、然るに世尊は二人同じく一趣に生じ同じく後世に於て斯陀含を得て兜率天に生せんと記説したま

ふ、云何にしてか梵行を修するも梵行を修せざるも同じく一趣に生じ其の後世を同じくするや」と、尊者阿難に問ふた。阿難は佛所に往詣して鹿住優婆夷の云ひし所を世尊に言上した。佛は阿難に告げて、「かの富蘭那は持戒すぐれ、梨師達多是智慧すぐれ、彼俱に命終せり。我は、二人同じく一趣に生じ同一に受生し後世また同じく是れ斯陀含にして兜率天に生じ一たび此處に來生して苦邊を究竟せんと説けり。如來に非ずんば誰か能く此の事を知ることを得ん」と説示せられた。此の二人同生の事蹟は『雜阿含』三十五の第二十一經に傳ふる所である。

一一

毗舍離(Vaishali)城に薩遮(Satyaka)と云ふ尼健子(Nirgranthaputra)が居た。彼は尼健子(離繫子)外道にして多數の弟子を有する名高き學者であつた。或る日、佛弟子の馬師(Magadhi)に遇ひ、馬師より佛陀の教説を聞き、佛と論議せんことを決意した。爾の時、毗舍離城の五百の童子は、一處に集在して何等かの事義を論究せんとして居た。薩遮尼健子は其の處に往至して、かの若き人々を誘ひ將ゐて世尊の所に往き問答論議した。佛が「色は無常なり」と説かるゝに對して彼は「色は常なり」と立説して論議したのであるが、遂に彼は默然として答ふる能はざるに至り、身體より汗を流し、佛の所説に歸服せざるを得なくなつた。かくて薩遮尼健子は佛と法と僧とに歸依して優婆塞と爲つた。それより彼は佛及び比丘僧を請じて飯食を供養し佛の教説を聽聞した。佛は彼の家に往き

其の供養を受け、漸次に施論・戒論・生天の論を説き、欲の穢惡なること姪の不淨なること出要を樂と爲すことを告げ、彼の心の開解したるを見て、苦・集・滅・道の四聖諦の法を教授せられた。さるほどに、尼健子の弟子五百人は、その師が佛に歸服して佛の教化を受けつゝあることを聞きて喜ばず、「我等が大師は何が故に瞿曇 (Gotama) を師として崇敬するや」と憤慨した。此等の諸弟子が毗舍離城を出で、中道に立ちて在りし時のことである。薩遮尼健子は、佛の所に詣で、法を聴き歡喜して歸途に就いた。その時、尼健子の弟子等は、遙に師の來るを見て、「此の沙門瞿曇の弟子、今この道を來る」と云つて、各々瓦石を取つて之を打ち殺した。此の事を聞きたる諸の童子等は、世尊の所に往至して此の事を告げ、「如來の教化し給ひし尼健子は今その弟子の爲に殺害せらる、彼は今已に命終りて何處に往生せしや」と問ひたてまつた。世尊は之に答へて、「彼は是れ有徳の人、四諦具足し、三結使 (身見・戒禁取見・疑) 滅して、須陀洹 (Srotāpanna 預流果) を成じ、必ず苦際を盡さん。今日命終りて三十三天に生ず。彼は彌勒佛 (Maitreya-buddha) に見えて當に苦際を盡くすべし。此は是れ其の義なり、當に念じて修行すべし」と説示せられた。されば、薩遮尼健子は、佛門に入りて其の弟子に殺され、忉利天に往生し、當來、彌勒佛出世の時、此の土に受生して彌勒佛の化導を受け、苦際を盡くして涅槃に證入する。此の事蹟は『增一阿含』三十の第五經に記傳せられてゐる。『雜阿含』六の第八經にも此の薩遮尼健子が論議して佛門に歸入したりしことを叙傳す。薩

遮尼捷子は後に大乘化せられて『大薩遮尼乾子所說經』十卷が誦傳せられた。此の經には、薩遮尼乾子が鬱闍延(Ujjayani)城の嚴熾(Candapradhyota)王の爲に正法を説きしことを叙傳してゐる。此の『大薩遮尼乾子所說經』十には、佛が文殊師利(Mañjuśrī)に告げ給ひしとして、「此の薩遮善男子は、此の賢劫を過ぎて、復無量無數劫を過ぎ已りて、當に阿耨多羅三藐三菩提を成すべし。佛を實慧幢王と名け、世界を善觀名稱と名く。」「彼の實慧幢王如來は、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、六十小劫、世に住して法を説き、後に涅槃に入る。佛涅槃して後、正法の世に住すること八十萬億百千億那由他劫なり。正法流行して衆生を教化す」と記説してあり。かくて薩遮尼乾子は大乗の菩薩と爲されて、將來無量無數劫の後に成佛して善觀名稱世界の實慧幢王如來と爲ると、大乘教徒によりて語り傳へられたものである。此の『薩遮尼乾子經』四に、嚴熾王が根本罪を問へるに答へて薩遮尼乾子が五種罪を告示したる教説あり。親鸞聖人は『教行信證』の信卷の終に大乘の五逆を説示するに、此の『薩遮尼乾子經』の五種の根本罪の教説を引用して居らるゝ。

## 二二

佛が衆多の上座比丘と俱に菴羅林(Āmṛatāka-vana)に住し給ひし時、摩師山(Matsikasāṇḍa)邑に住する質多羅(Citra)長者は、屢々此の林園に詣で、法を聞き、諸の上座比丘を訪れて法義を尋問した。此の菴羅林の精舎は質多羅長者の建立し奉獻したるものである。『増一阿含』三の「清信士品」

にては、第一智慧の質多長者と讚美せられてゐる。『雜阿含』二十一の第八經より第十七經までの諸經には、此の長者の聞法得道の行蹟が種々記傳せられてゐる。長者は菴羅林の諸の上座比丘の所に詣で、上座比丘より種々の示教を受けた。尊者那伽達多(Nāgadatta)より佛説の偈頌を教授せられ、又佛所説の無量心三昧・無相心三昧・無所有心三昧・空心三昧を説示せられ、自ら其の義を解説した。那伽達多是「汝は大利を得たり、甚深の佛法に於て賢聖の慧眼をもつて得入したり」と稱讚した。『雜阿含』二十一の第十七經には、長者の臨終と往生との事蹟が叙傳せられてゐる。長者が病苦に惱み親族に圍繞せられて居た時に、衆多の諸天、長者の所に來り、「汝當に發願すべし、轉輪聖王に爲ることを得べし」と告げた。長者は諸天に語りて、「若し轉輪王に作らんも、彼また無常なり苦なり空なり無我なり」と、其の志願する所に非ざることを告げた。長者は此の事を親屬に物語り「我いま作心す。唯また胞胎に受生することを見ざらん。丘塚を増さざらん。血氣を受けざらん。世尊の説きたまひしが如き五下分結(身見・戒取・疑・貪・瞋)は我に有ることを見ず。我自らその一結にても斷せざるを見ず。若し此の結を斷せざれば則ちまた此の世に生するならん」と、五下分結を斷じて阿那含(Anāgāmin) 不還果を得たりしことを告げ、病牀より起きて結跏趺坐し、正念に住して偈を説きて命終る。かくて長者は命終りて不煩熱天に往生した。(不煩熱天は色界の第四禪天の上位に存する淨居天にして、阿那含果を得たる者は此等の淨居天に往生すべしと爲されてゐる)質多羅



は上界に往生して天子と爲り、「我いま此處に停留すべからず、閼浮提 (Jambu-dvīpa) に往きて諸の上座比丘を禮拜せん」と思念し、力士の臂を屈伸するほどの頃に、天の神力を以て菴羅林中に來至した。その時、一りの比丘あり、夜起きて房を出で、露地に經行して居て、勝れたる光明の普く樹林を照すを見た。「是れ誰の妙なる天色、虚空の中に住するぞや」と尋問したりしかば、天子は偈を説きて質多羅長者なることを告げて、其の光容は、やがて没して見えなくなつた。かくて、長者は、阿那含果を得て、欲界を離脱して上界に往生し、上座比丘の教授の恩に謝せんが爲め光明赫奕として菴羅林に來詣したものであると、語り傳へられたのである。

### 一三

『阿含』等の古聖典には佛在世の修道者の往生の事蹟が種々に叙傳せられてゐる。須陀洹・斯陀含・阿那含の道位を得たる人々は、善處天上に往生して涅槃の道に趣向した。諸種の記傳には、その往生を叙して得道を説かざるあり、或は聲聞の得脱・辟支佛の得果を記説せるあり、或は遠き將來に於て此の土に出生して彌勒佛に値遇し苦際を盡くすことの豫言せられたるもあり。如上の記述により原始佛教に於ける往生思想の概略如何なるものなりしかを推知せなければならぬ。さるほどに、大乘の菩薩道は、甚深の般若 (Prajñā 智慧) を學修せしめ、頗る遠大なる理想のもとに往生來生して佛果の正覺に進趣することを教ゆるものである。大乘を信解する者は、此の世界にのみ在りて修行

せんとするものではなく、他方世界に往生し、或は他方世界より來生して、一佛國より一佛國に至り、一國土より一國土に至りて、諸佛を供養し衆生を教化して、自利利他の功德を積累する。菩薩は十方の有佛無佛の國土に往生して、佛の示教を受けて修道を増進し、廣く衆生に結縁して一切世間を化導し利濟せんとするものである。かくて先づ大乘佛教の初期に於て其の往生すべき他方佛國土の説示せられたりしは、東方阿閼佛 (Aksobhya-buddha) の妙樂 (Abhirati) 世界と西方阿彌陀佛 (Amitabha-buddha) の極樂 (Sukhāvatī) 世界とであつた。此等の世界は清淨莊嚴の淨土にして無量無數の聲聞衆あり菩薩衆あり。三惡道なく穢惡不淨なく諸の障礙なく、菩薩も聲聞も往生して佛の説法を聽き速に道果を證得する妙土である。初期大乘の聖典には、此等の佛國土を説示すべく『阿閼佛國經』『無量壽經』等が誦傳せられた。かくて又大乘初期の聖典である『摩訶般若波羅蜜經』には阿閼佛國への往生が説示せられてゐるのである。

## 一四

『阿閼佛國經』は後に『大寶積經』に編入せられて第六の『不動如來會』と爲されてゐる。後漢譯の『阿閼佛國經』と唐譯『大寶積經』十九・二十に編傳せらるゝ『不動如來會』とは、同經の異本である。その『不動如來會』の「往生因緣品」の終には、佛が此の法門を説き給ひし時、五百の比丘は無漏法に於て心に解脱を得、五千の菩薩・六千の比丘尼・八千の優婆塞・十千の優婆夷・及び欲界の

中の無量の天子は、皆彼の阿闍佛國に受生せんことを願じ、如來は是の時、皆當に彼の佛刹に往生することを得べしと授記し給ひしと、記傳せられてゐる。

小品『般若波羅蜜經』七の「恒伽提婆品」・大品『般若波羅蜜經』十八の「河天品」には、恒伽提婆(Gaṅgādeva)といふ女人の往生成佛の事が記說せられてゐる。會中に恒伽提婆といふ女人あり、座より起ちて、偏に右の肩を袒き、右の膝を地に著けて、合掌して佛に向ひ、「世尊。我、是の事に於て驚かず怖れず、我、來世に於て、亦衆生の爲に斯の要を演說すべし」と、大乘深妙の法を信解したることを陳べ、金華を持して佛の頂上に散じて供養した。その時、佛は微笑し給ひ、阿難の問に答へて、「この恒河提婆は、當に未來世の星宿劫の中に於て成佛することを得べし、金華佛と號す。此の女身を畢りて、轉じて男子と爲ることを得て阿闍佛の阿毗羅提(Abhirati 妙樂)國土に往生し、彼の佛の所に於て常に梵行を修して金華菩薩と號し、命終りてまた他方の佛土に往生し、一佛土より一佛土に至り、常に梵行を修し、乃し阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで諸佛を離れず。是の女人は、昔、燃燈佛(Dīpaṅkara-buddha)の所に於て初めて善根を種ゑ、その善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、また金華を持ちて燃燈佛に散じて阿耨多羅三藐三菩提を求め、未來世に於て記別を受くることを得んと發願したりなり。かくて今是の女人は阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得たり」と告げられた。されば、恒河提婆は、遠き過去世に於て燃燈佛に従ひ初めて發

心して善根を植ゑ、久しく大乘を修行し、今この釋迦牟尼佛の大會に參じて甚深般若の妙法を聽受し、命終りて女身を轉じて男子と爲り阿閼佛の妙樂世界に往生し、金華菩薩と號し、それより一佛國より一佛國に往生して常に諸の波羅蜜(Paramita)を淨修し、諸佛を供養し衆生を教化して、此の世界の賢劫の後の星宿劫の時に來生して阿耨多羅三藐三菩提を成就して金華佛と爲るのである。

大品『般若經』二の「往生品」には、舍利弗(Sariputra)の間に答へて廣く佛が般若波羅蜜(Prajñā-pāramitā)を修行する菩薩の來生往生の相を說示せられしことが載せられてゐる。佛は先づ「是の菩薩(Bodhisattva)摩訶薩(Mahāsattva)般若波羅蜜を行じ能く是くの如く習し相應する者は、或は他方の佛國より此の間に來生し、或は兜率天上(Tuṣita-deva)より此の間に來生し、或は人道の中より此の間に來生す」と、種々の來生あるを告げ、それより亦種々の往生あることを說示せられた。かくて此の「往生品」の終には、三百の比丘・六萬の欲天子・等の往生得道の事が記說せられてゐる。三百の比丘は、座より起ちて、著する所の衣を佛に上りて、無上道心を發した。佛は微笑して口より種々の光を出し給ふ。阿難(Ānanda)は起ちて衣服を整へ合掌して其の因縁を問ふた。佛は阿難に告げて、「是の三百の比丘は、是より已後六十一劫にして當に佛と作り皆號して大相と名くべし。是の三百の比丘は、此の身を捨て、當に阿閼佛國に生ずべし。及び六萬の欲天子は、みな阿耨多羅三藐三菩提心を發し、彌勒佛(Maitreya-buddha)の法の中に於いて出家して佛道を行すべし」と記

說せられた。されば、此の會に在りし三百の比丘は、命終りて阿閼佛の妙樂世界に往生し、六十一劫の後に成道してみな大相佛と爲るのである。六萬の欲天子は、將來彌勒佛出世の時、此の人界に生じて佛の說法を聞き出家學道するものである。

## 一五

大『無量壽經』には種々の異本が傳持せられて、支那譯の五本と梵本と西藏譯本とが現存してゐる。その最古本と想はるゝ者は『佛說阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經』〔略稱『大阿彌陀經』〕である。これに類似した異本は『無量清淨平等覺經』である。梵本『Sukhāvatīyūla』は『無量壽經』の大『無量壽經』諸本の正宗分の終には、此の世界及び他方の佛國より阿彌陀佛國へ往生する菩薩の數が説かれてゐる。大『阿彌陀經』には、阿逸(Ajita 無能勝)菩薩が「是の間より當に幾何の阿惟越致(Avaivartika不退轉)の菩薩ありて阿彌陀佛國に往生すべきや」と尋ねたるに答へて、佛は、「我が國より當に七百二十億の阿惟越致の菩薩ありて皆當に阿彌陀佛國に往生すべし。一りの阿惟越致の菩薩は、前後に無央數の諸佛を供養し、次で彌勒の如くに皆當に作佛すべし。其餘の諸の小菩薩の輩は、無央數にして復計る可らず、皆當に阿彌陀佛國に往生すべし」と説示せられたとあり。それより更に佛は他方の佛國より多數の菩薩が阿彌陀佛國へ往生することを告げられた。(今そ

の他方の佛名を梵本の佛名に照合すれば「但だ我が國中の諸の菩薩當に阿彌陀佛國に往生すべきのみならず、他方の異國にも佛ありて亦復是くの如し。第一の佛を頭樓和斯 (Dusprasaḥa 難忍) と名づく。其の國に百八十億の菩薩ありて皆當に阿彌陀佛國に往生すべし。他方異國の第二の佛を羅鄰那阿竭 (Ranākara 寶藏) と名づく。其の國に九十億の菩薩ありて皆當に阿彌陀佛國に往生すべし。他方異國の第三の佛を朱蹄彼會蔡 (Yotiṣprabha 火光) と名づく。其の國に二百二十億の菩薩ありて皆當に阿彌陀佛國に往生すべし。他方異國の第四の佛を阿蜜蔡羅薩 (Amītaprabha 無量光) と名づく。其の國に二百五十億の菩薩ありて皆當に阿彌陀佛國に往生すべし」等と說かれてゐる。今、吳譯『大阿彌陀經』と魏譯『無量壽經』との所說を對照すれば、その諸佛國の佛名と當に阿彌陀佛國に往生すべき菩薩の數とは、左の如くに說示せられてゐる。

大『阿彌陀經』

(佛名)

(菩薩往生)

- (1) 頭樓和斯
- (2) 羅鄰那阿竭
- (3) 朱蹄彼會蔡
- (4) 阿蜜蔡羅薩

- 百八十億
- 九十億
- 二百二十億
- 二百五十億

『無量壽經』

(佛名)

(菩薩往生)

- (1) 遠照
- (2) 寶藏
- (3) 無量音
- (4) 甘露味

- 百八十億
- 九十億
- 二百二十億
- 二百五十億

(5)	樓波黎波蔡躑	六百億	(5)	龍勝	十四億
(6)	那惟于蔡	萬四千	(6)	勝力	萬四千
(7)	維黎波羅潘蔡躑	十五	(7)	師子	五百億
(8)	和阿蔡	八	(8)	離垢光	八十億
(9)	尸利群蔡	八百一十億	(9)	德首	六十億
(10)	那他蔡	萬億	(10)	妙德山	六十億
(11)	和羅那惟于蔡躑	萬二千	(11)	人王	十億
(12)	沸霸圖耶蔡	無央數	(12)	無上華	無數不可稱計
(13)	隨呵閱祇波多蔡	七百九十億	(13)	無畏	七百九十億

此の世界より阿彌陀佛國に往生する阿惟越致（不退轉）の菩薩は、大『阿彌陀經』・『無量清淨平等覺經』には七百二十億と説かれてゐるが、『無量壽經』には六十七億、『無量壽如來會』には七十二億、『Sukhāvatīvyūha』・『Ārya Amitābha vyūha nāma Mahāyāna Sūtra』(西藏譯)・『大乘無量壽莊嚴經』には七十二俱胝那由他 (koṭi-niyuta) と説かれてゐる。かくも多數の阿惟越致の菩薩が此の世界より彼の阿彌陀佛國へ往生するのである。而して魏譯『無量壽經』には、「諸の小行の菩薩、及び少功德を修習せん者、稱計す可からず、皆當に往生すべし」と説き添へてある。

唐譯『無量壽如來會』の流通分には、此の經を聽受したる諸の衆生の得益を叙説して、次に、「四萬億那由他百千の衆生あり、無上菩提に於て未だ曾て意を發さざりしに、今初めて發して諸の善根を種ゑ、極樂世界に生じて阿彌陀佛を見たてまつらんと願じて、皆當に彼の如來の土に往生すべし。各、異方に於て次第に成佛して同じく妙音 (Mañjuśvara) と名づけん。八萬億那由他の衆生あり、授記と法忍を得て無上菩提を成ず、彼の無量壽佛が昔菩薩の道を行じたまひし時に成熟したる有情にして、悉く皆當に極樂世界に生ずべし」と記説してあり。かゝる發心往生、異方成佛の事は、梵本『Sukhāvatīvyūha』・西藏譯本『聖無量光莊嚴大乘經』にも記載せられてゐる。菩薩が阿彌陀佛國に往生して修道を増進し終に異方に於て成佛するといふことは、往生と成佛との事義を研學する上に於て頗る注意すべき事柄である。

一六

佛が墮舍羅 (Vāśālī) の樂音といふ處に在ましたる時、貧窮なる老女が佛所に來詣して佛より深妙の法を聽受したことがある。老女は頭面を地に著けて佛を禮拜して、「願はくば問ふ所あらんと欲す。生老病死は、何處より來りて、去つて何處に至るや。色受想行識は、何處より來りて、去つて何處に至るや」等と、諸法の實相を問ふた。佛は之に答へて、「生老病死は、從り來る所なく、去つて亦至る所なし。色受想行識は、從り來る所なく、去つて亦至る所なし。譬へば兩木の相摺りて火



出で、還つて木を焼き木盡きて火便ち滅するが如し。因縁合すれば便ち火を得、因縁離散すれば火便ち滅す。諸法も亦是くの如し。因縁合すれば乃ち成じ、因縁離散すれば即ち滅す。従り來る所なく、去つて亦至る所なし。目は色を見る、即ち是れ意なり、意即ち是れ色なり。二者は俱に空にして所有なし。成滅また是くの如し」等と説示せられた。老女は之を聞きて大に歡喜して、「佛恩を蒙りて法眼を得。身は羸老すと雖も今開解することを得たり」と感謝した。阿難は怪みて「此の老女は如何にして斯くも智慧ありて佛の言説を聞きて開解せしや」と佛に尋ね申した。佛は阿難の間に答へて、「此の老女人は是れ我が前世に發意學道せし時の母なり。往昔、拘留秦佛 (Kṛakucchanda-buddha) の時に、我、沙門 (Śramaṇa) と爲らんと欲す。此の母、慈愛して、我に出家することを許さず。我は憂愁して一日食を取らざりき。是に因りて、母は、五百世、世間に來生して貧窮の身と爲る。今や壽盡きなば當に阿彌陀佛國に往生すべし。諸佛を供養して、却後六十八億劫にして、當に成佛して波韃と號すべし。其の國を化華と名づく。被服、飲食、忉利天上の如く、其の國の人民みな壽命一劫ならん」と説示せられた。深法を聞きて開解したる此の老女人は、宿緣深く、愛の宿罪によりて永く貧苦を受けたるも、今は佛より斯かる深妙の法を聽受し、命終りて阿彌陀佛國に往生する身と爲つたのである。かくて六十八億劫の後に成佛することが記説せられたのであつた。此は是れ『老女人經』に説かるゝ所である。此の經の支那譯は『老女人經』『老母女六英經』『老母經』

の三異本を傳へて居る。

一七

佛が拘鹽惟(Kausambi)國に至り給ひし時、國王の優填(Udyana)は十四歳であつたが、佛の到來を聞きて、傍臣左右に勅し、皆悉く嚴駕出行して佛を迎へた。王は遙に佛を見て踊躍歡喜し、下車步行して佛前に進み、頭面を佛足に著けて禮拜した。かくて王は長跪叉手して佛德を讚稱し、「人、善を作さば、其の福祐を得て當に何れに趣向すべき。佛去り給ひし後、我恐らくは復佛を見たてまつらざらん。我、佛の形像を作り、恭敬して之に承事せば、後に當に何等の福を得べきや。願はくば哀愍して説き給へ」と請問した。佛は此の請問に答へて佛像を作る福德の多大なることを告げられた。「天下の人、佛の形像を作れば、其の後世所生の處にて、眼目は淨潔、面貌は端正にして、身體、手足、常に好く、天上に生じて亦淨潔にして諸天と絶異す。死後、第七梵天上に生ずることを得て、また餘の天に勝りて端正絶好にして諸天の敬ふ所と爲らん」等と、種々の得福あることを説示せられた。王は佛の所説を聞きて歡喜し、群臣と共に佛を禮拜して辭去した。かくて其の後みな命終りて阿彌陀佛國に往生した。是れ『佛說作佛形像經』に記傳する所である。佛の示教としては六欲天よりも高き果報である梵天に生ずることを得るなどと其の得福を告げられて居るのであるが、經の終には「壽終りて皆阿彌陀佛國に生ず」と添記してあり。此の經として此の最後の一句は

實に不思議な文字である。此の一句によりて大乘化せられてゐる經典である。阿彌陀佛國に往生したる人々の其の往生得道の事蹟を記傳したるものは、原始時代の聖典には頗る僅少である。さりながら猶ほ此の種の行蹟の記叙すべき事は種々あるなれども、其等に就きては後日更に稿を起して論述しやうと思ふ。